転移されますた←えっ

大久保正則

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
転移されますた←えっ

【Ｎコード】
Ｎ１８５６Ｒ

【作者名】
大久保正則

【あらすじ】
色々とやう〝ぁい事があるかもしれないのでご注意を。

序章

宇宙西暦１００年
人々は宇宙へ移住してから十九世紀たち、増えすぎた人々を宇宙へ移住させた。その広さは他銀河系に広がっていった。他銀河系に移り住んだ人々は独特の生活を始めた。
だが、他銀河系に移り住んだ人々の一部が軍事国家を結成、僅か一ヶ月で銀河系の一つを制圧した。そして、その銀河系、アルバザル銀河は一つの軍事国家アルベイ連合同盟国家と名乗る国家の支配下となり、他の銀河系に宣戦布告を行う。
そう、今、ここに第一次宇宙戦争が、勃発した。
アルベイ連盟は最初こそは他の銀河系の波状攻撃に苦戦を強いられ、防衛で手一杯だったが、突然アルベイ連盟は攻勢に代わり、一瞬にして周辺銀河系は全滅した。それを引き金にアルベイ連盟に宣戦布告をされた銀河系は地球を中心にウィルベル連合軍を結成、アルベイ連盟の全面戦争が行われる。
戦争は泥沼化し、１８００年間続き、死者が五十億を超えた。
長きに渡る戦争は、未だに、収まる気配を見せない。だが、アルベイ連盟の圧倒的物量攻めにウィルベル連合は苦戦を強いられ、戦線縮小を強いられた。
そして、この物語は１８００後の未来、アルベイ連盟の戦禍は太陽系最前線防衛惑星、冥王星の近くのコロニー、スター７にじわじわと近づいていたのだった……。

４９６２年１月５日
ＡＭ１０：４８
円形型コロニー
スター７
第二宇宙港管制所
此所、スター７第二宇宙港管制所に、数十人の人が自分の持ち場にある画面に向かっている。

「司令！、小型輸送船２５隻と中型客船５、さらに大型輸送船５隻が入港許可を願っております。どうしますか？。」

一人の男性が言った。どうやら一般通信兵のようだ。一番上に座っている男性（司令官クラスと思われる。）は

「他の港に入港できないのか？。」

と聞いた。通信兵は首を横に振った。

司令官は

「そうか……。仕方がない。入港を許可する。」

と、通信兵に伝えた。通信兵は敬礼し、どこかに電話らしきもので伝えた。

すると、管制所の横に有る縦３００ｍ、横６００ｍの巨大な蒲鉾型ゲートが右側から開いた。どうやら扇子を閉じるような感じで開いているようだ。

ゲートから１?半離れた離れた場所に艦影が多数見える。ゆっくりと多数の艦影、輸送船団と客船団はゲートに近づいてきた。

突然、先程とは違う通信兵が叫ぶ。

「司令官!、巨大輸送船一隻がワープアウトしました!。同時に、ＳＯＳ信号を受信しました!。艦の状況からして大破!、航行は不可能の可能性大!!。また、巨大輸送船から通信が来ております!。」

司令官は真剣な顔で叫ぶ。

「急ぎ第六防衛艦隊を出せ!。第二護衛空母と牽引艦もだ!。それと通信を開け!。」

司令官がそう叫び、窓の上のモニターに映像が出た。恐らく艦矯だろう。艦矯内は所々火花が飛び散り、相当被害を受けたようだ。また、モニター画面に映った人物は、某五番目の人形をそっくりそのままコピーした姿だった。

ん?そっくりそのまま?。

『此方、第二宇宙主要輸送船団司令官の真紅です。』

……後で作者を締め上げるか。真紅はそう言って敬礼した。司令官は鋭い目付きで問いかけた。

「一体何がありましたかな？。真紅大将。」

真紅は司令官の質問にこう答えた。

『アルベイ連盟からの奇襲を受け損害を被りました。我が艦以外にも他に十七隻が居たけれど、敵の謎の攻撃に全滅したわ。青白い光がしたかと思えば他の艦は藻屑になっていたのよ。その後、敵艦隊の奇襲でこの有り様だわ。』

真紅は悔しそうな顔で言った。司令官は何かを考えるような顔だった。

そんな中、外のゲートから四十隻の駆逐艦、何の武装もしていない十六隻の巡洋艦、そして甲板に艦橋が無い空母八隻が入港中の艦船団の上を通って出撃した。駆逐艦は全長１２４．９ｍ、全幅２３ｍで、艦後部に艦矯が有り、その艦矯前に六つの穴が空いた箱型があり、艦前部に１２．７ｃｍ連装衝撃砲（ショックカノン）を一基搭載しており、艦中央の両舷の側面には１５．５ｃｍ収納式三連装衝撃砲を一基ずつ搭載されていた。巡洋艦は全長１６２．１ｍ、全幅２６．２ｍ程の葉巻型の艦艇で艦中央からやや後方に艦矯が配置されており、艦尾には大型のクレーンが一基配置されているだけで、非武装型の艦艇だった。空母は全長１９８．１ｍ、全幅３４ｍ程で航空甲板の長さは１６８．１ｍである。また、この艦艇の形状は第二次世界大戦で言うところの龍驤に似ており、両舷に２０ｍｍ対空パルスレーザーと１２．７ｃｍ連装高角砲を多数、搭載していた。

第六防衛艦隊と思わしき艦隊はかなりの速さ―推定時速約１．６光年の速度だと思われる―で輸送船に向かった。

その後方から牽引艦と第二護衛空母が着いていった。

『司令官、本艦の被害は甚大、航行は不可能だわ。』「それなら既に牽引船を派遣した。護衛空母と防衛艦隊をな。」

司令官は、真紅にそう言った。

真紅は極力顔を変えてないようにしている。端から見れば無表情だが、眉が一瞬ピクッと動いたのを、司令官は見逃してはいないが、あえて見逃した。

すると通信兵が突如、叫ぶ。

「司令官!。本部から伝令!!。一時間後に新造戦艦二隻と新造巡洋艦六隻、新造駆逐艦四隻、新造空母四隻がスター7第二宇宙港に到達するとのこと!!。」

それを聞いた司令官は艦隊に言った。

「一時間後に新造艦隊が到達する。それまでに作業を終わらせろ!。」

艦隊は作業スピードを早め、十分で作業を終わらせた。そしてゲートに向かい始めた。

五十分後

「司令官。新造艦隊がご到着致しました。」

「うむ。ゲート内を外部空圧に合わせ、開け。」

先ほどまで閉まっていた門は右から左へ扇子を閉じるような感じで開いた。

約１？離れた場所に一個艦隊が近づいている。

艦隊は全て独特の形状で、駆逐艦の形は艦矯が艦中央ではなく、前部側にあり、その中心には煙突が三本連なる様に存在していた。また後艦矯が三本目の煙突のすぐ近くにあった。艦両舷に３０ｍｍ連装対空パルスレーザーが複数あり、艦前部には１５．２ｃｍ連装衝撃砲が一基あり、艦後部にも同じ衝撃砲が二基あった。艦中央には、第二次世界大戦にあった魚雷発射基が二つ、煙突に挟まれるように二基あった。この兵装は８０ｃｍ四連対消滅反応弾と呼ばれており、魚雷の様な形をしながら、敵に当たると敵の質量が熱量エネルギーとなり、敵艦を破壊する凶悪な兵器、言うなれば、対消滅反応弾は反物質と物質をぶつけるような物である。

閑話休題

巡洋艦の一つは、前部に２０．３ｃｍ連装衝撃砲を三基、内一基は砲射線上に被さるように配置されている。艦後部も然り。艦中央の前方に艦矯が有り、その後ろには二つの煙突がまるでくっついたような形をした煙突で、その煙突の直ぐ後ろに後艦矯がある。後艦矯はクレーンと一体化させたような形をしている。また、艦両舷にカタパルトがあった。さらに、過剰とも言うべきほどの３０ｍｍ三連対空パルスレーザーと１０ｃｍ連装衝撃砲を針鼠の如く搭載されていた。もう一つの巡洋艦は、艦矯、煙突が一体化した艦で、後艦矯も同じ様に煙突と一体化した後艦矯だ。１５．５ｃｍ三連衝撃砲を艦前部に二基、後部に二基搭載し、艦中央両舷の側面に全方位対応型１２．７ｃｍ連装衝撃砲を二基搭載しており、２５ｍｍ三連対空パルスレーザー多数と５７ｍｍ連装衝撃砲を六基搭載していた。

戦艦は大和型を二周り小さくして宇宙に浮かばせたような戦艦だった。４０．６ｃｍ三連衝撃砲三基、１５．２ｃｍ三連衝撃砲二基を搭載し、２５ｍｍ対空パルスレーザーと１２．７ｃｍ連装衝撃砲を針鼠の如く、艦全体、艦底も例外なく配置していた。もう一隻は４０．６ｃｍ連装衝撃砲四基を搭載、１５．５ｃｍ連装衝撃砲を八基搭載し、１２．７ｃｍ三連衝撃砲十基、２５ｍｍ対空パルスレーザーを多数搭載した戦艦だ。空母の一隻は第二次世界大戦の空母に似ており、航空甲板の直ぐ下の両舷に２０ｍｍ対空パルスレーザーと１２．７ｃｍレーザー砲多数、艦後部、前部側面に２０．３ｃｍ単装衝撃砲を総計十基搭載していた。二隻目は全通航空甲板を持ち、２５ｍｍ対空パルスレーザー、１２．７ｃｍ連装衝撃砲、２０ｃｍ１２連対艦噴進砲を多数搭載し、艦上空を護りに徹底した対空型航空母艦だ。三隻目はかなり巨大化しており、全長６ｋｍもある巨大正規空母である。その分、対空パルスレーザーが艦全体に配備されている。形状は飛行船の様な形に幅５２ｍ、長さ４．２ｋｍの甲板が両舷にくっつく様な形になっており、両舷航空甲板から艦体に繋がるのがある。また、艦前部に艦内部から外部に出る形になっている。最後の一隻はとある機動戦艦の主役艦の様な形をしている。艦首部分から艦中央後方までが二股になっており、その二股部分が内蔵式の航空甲板となっている。内蔵式航空甲板後方に着艦口があり、内蔵式航空甲板の艦首部分の前方に発艦口がある。艦後部は艦矯で埋め尽くされ、その艦矯と航空甲板部分に２５ｍｍ連装対空パルスレーザーを搭載している。

そんな艦隊が入港を始めた。艦隊は牽引船に引っ張られ、港に似た埠頭に入港した艦隊は両舷のどちらかの方からタラップを下ろし、そこから乗組員が降りてきた。兵士は非常に真面目そうな顔ぶれだ。その艦隊の指揮官が甲板からタラップを伝って埠頭に降りた。すると新造艦隊の提督である、ゴスペラー・ファレイド・アルフェイドがこう言った。

「貴方がこのコロニーの総司令官ですか？。」

ゴスペラーが司令官にそう聞いた。

「いえ、私は第二宇宙港指揮管制所司令官のファルディア・フェアリー元帥です。総司令官は葉月慧丞(ハヅキケイスケ)準一等兵ですが、何か？。」

司令官、ファルディア・フェアリーは敬礼しながらゴスペラーに言ったが、周りの人を驚かせた。それもそうだ。準一等兵の階級は一般兵士位のクラスだ。驚く以外どう表現すれば良いのか解らない程に奇想天外の事だ。無論、スター7の兵士も同じだが、大尉、又は中将程だろうと思っていたようだ。

「な、何故、その準一等兵の葉月さんが、このコロニー一つを任されているのですか？。」

ゴスペラーは司令官は笑いながらこう言った。

「私以上の能力と実力が有るからですよ。過去のシュミレーション訓練で、五回中四回敗退してしまったので、それに。中々面白い考え方で戦局を勝ち抜いてるんですよ。」

この発言に周りの人を再び驚かせた。特に驚いたのはゴスペラーと真紅だった。彼は過去のアルベイ連盟軍とのアンドロメダ銀河での全面戦争にてアルベイ軍六個主力艦隊を四隻編成の一個小艦隊で撃滅した戦歴を持っていたりするすごい人。そんな人より上の実力を持った人って一体……。

そんな中、一人の兵士が司令官に駆け寄った。

「ファルディア・フェアリー元帥。葉月慧丞総司令官が真紅大将とゴスペラー・ファレイド・アルフェイド少将をコバルト級巡洋戦艦七番艦フェザー・シュトラッサーに、ご案内致せ。とのことです。尚、フェザー・シュトラッサーは二人の友と共に第一宇宙港第三十七番埠頭から出航、十分後の１３００、宇宙空域Ｄ－４０８ＡＷの小惑星地帯でパーティーを開催する。とのこと。」

兵士はそう言って、敬礼した。ファルディア・フェアリー元帥はほう、とつぶやき、そこにいた兵士達にこう言った。

「Ｓ２１Ｗ２Ｘを発令する！。Ｄ－４０８ＡＷの小惑星地帯に向かうぞ！。」

ファルディアがそう言いきったと同時にその場にいた新造艦隊以外の兵士達は乗艦を始め、あっと言う間にそれを終わらせた。ファルディアも近くのコバルト級巡洋戦艦一番艦コバルトに乗艦した。

「真紅大将は我が艦に御乗艦ください！。それとゴスペラー少将は新造艦隊と共に着いてきてください！！。」

ファルディアはそう叫んだ。真紅は空気がいきなり変わったことに戸惑ったが、ただ事ではないと感じとり、即座に行動に移した。ゴスペラーは全くもって状況を掴めないままだが、言われた通りに新造艦隊の旗艦に乗艦した。

全員が乗艦し終わると同時にゲートが開いた。まるで図ったかのようなタイミングで、だ。そしてファルディア元帥が率いるスター７所属第六艦隊とその護衛艦隊の第八艦隊、そしてゴスペラー少将が率いる地球第十六艦隊が出撃した。

出撃した艦隊の詳細は

スター7所属

第六艦隊

旗艦

コバルト級巡洋戦艦

コバルト

護衛艦

フィンガー級巡洋戦艦

フィンガー

デラード

バード級巡洋戦艦

バード

比叡型重巡洋艦

比叡（ヒエイ）

夕張（ユウバリ）

古鷹（フルタカ）

天龍（テンリュウ）

那智型軽巡洋艦

那智（ナチ）

足利（アシカガ）

羽黒（ハグロ）

愛宕（アタゴ）

松型駆逐艦

松（マツ）

梅（ウメ）

桜（サクラ）

鈴（スズ）

第八艦隊

旗艦

エセックス級正規空母

エセックス

護衛艦

エセックス級正規空母

レンジャー

ミッドウェイ級正規空母

ミッドウェイ

エンタープライズ

高雄型重巡洋艦

高雄（タカオ）

妙高（ミョウコウ）

最上（モガミ）

海鳥（カイチョウ）

琉球（リュウキュウ）

青葉（アオバ）

クリープラント級軽巡洋艦

クリープラント

サンフランシスコ

インディアナポリス

セントルイス

ボストン

アストリア

地球所属

第十六艦隊

旗艦

グラーフ・ツェップェリオン級正規空母

グラーフ・ツェップェリオン

護衛艦

エウロパ級正規空母

エウロパ

天城型正規空母

天城（アマギ）

赤城型正規空母

赤城（アカギ）

加賀型戦艦

加賀（カガ）

ドットリオ級戦艦

ドットリオ

アドミラル・ヒッパー級重巡洋艦

アドミラル・ヒッパー

バルクンテ

グニグンテ

阿賀月型軽巡洋艦

阿賀月（アガヅキ）

阿武隈（アブクマ）

阿賀野（アガノ）

陽炎型駆逐艦

陽炎（カゲロウ）

雪風（ユキカゼ）

島風（シマカゼ）

秋風（アキカゼ）

で構成されている。
尚、他にも艦隊があるが、それは後程説明しよう。
三個艦隊はＤ－４０８ＡＷ小惑星地帯、フェルニダルバト星を一つの円形を目指した。

艦隊は第六艦隊を前衛に、第十六艦隊を中央、第八艦隊は第十六艦隊を囲むようになっている。「全艦に次ぐ！、ワープシステムを作動、フェルニダルバト星近辺にワープを行う！。総員配置に付け！！。」

ファルディア元帥はハッキリとした口調で、全艦隊に指示を下した。第六、第八艦隊は十秒でワープ体制に入ったが、第十六艦隊は一分かかった。第十六艦隊の練度は目に見える程に低いのが解る。その後、全艦隊は粒子状になり、凄い勢いでワープアウト場所、フェルニダバルト星近辺小惑星地帯まで飛んでいった。

ＰＭ０１：１２
フェルニダルバト星
小惑星地帯近辺
巡洋戦艦
フェザー・シュトラッサー
戦闘艦橋

ここ、フェルニダルバト星の小惑星地帯で大規模艦隊戦が勃発している。
その内の一個艦隊の巡洋戦艦、フェザー・シュトラッサーに一人の男性が艦長席に座っていた。その男性に一人の男が叫んだ。

「慧丞艦長！右翼を突破されました！。このままでは、我が艦隊は包囲されます！！。どうか撤退命令を！。」

どうやらこの男性は葉月慧丞本人のようだ。慧丞は

「いや、撤退はしない。」

と鋭い目で言った。男は非常に驚いた。慧丞は続けてこう言った。

「今引けば、スター７に被害が及んでしまう。それを裂けるために、我々はこのまま敵艦隊を足止めをする。副長、全艦隊を後退、敵艦隊を引き付け、増援艦隊の到達を待つ。」

そう、葉月は言った。そして、葉月は囁くように言った。

「彼等が上手くやってくれると、良いがな……。」

慧丞は、そう願うように言った。

同時刻
アルベイ連盟第二艦隊
旗艦
戦艦ウィルバーシュ
戦闘艦橋

「ベラード艦長。敵左翼艦隊、後退を開始、それと敵中央、右翼艦隊も同じ様に後退を開始しました。このまま行けば我々は戦闘に勝利できます。」

はっきりと兵士はそう言った。いきなりだか、此処はアルベイ連盟軍艦隊の主力艦隊旗艦の戦艦ウィルバーシュ艦橋。全長５６７２ｍ、全幅３１６ｍ、全高７６２ｍ級で、艦首にはレーザー砲、それも７６０門以上の砲門を有する、アルベイ連盟第二艦隊旗艦である。ついでに言うと、作者がウィルバーシュに居る方々の様子を見てこい。と言われたので来ました。

ベラードと呼ばれたオッサン、ベラード・ガンディフォル・アルベント・ファンレイス・ディントは

「そうか、解った。全艦、陣形を維持しつつ突撃、敵艦隊を撃滅しろ。」

と言った。
アルベイ艦隊全てが同時に動き、攻撃を始めた。尚、アルベイ連盟とウィルベル連合の艦船の違いは、宇宙戦艦ヤマト見たいに水上艦をモチーフにしたか、銀河英雄伝見たいに艦が細長く正面に集中砲

火を浴びせる艦かの違いだ。と言うより、宇宙戦艦ヤマトの出来事が起き、銀河英雄伝も同じく起きた。言うなればその出来事が起きた数多の平行世界の内の一つである。

「ふ、奴等も逃げるのに必死だな。だが、我々には勝てないのだ。バカな奴等だな。」

高笑いをするベラード中将。だが、こう言うのは

（（（（（（（フラグでしかないよなぁ。））））））））

艦橋にいた兵士全員がそう思った。直後、ウィルバーシュ後方から爆発音が聞こえると共に衝撃が走った。

おごっ、と言う声と共に倒れたベラード中将。その後、口を押さえながら悶えている。

どうやら物の見事に舌を噛んだらしい。兵士達は衝撃に備えていたため、何ともなかった。

ベラード中将は痛みに耐えながらこう言った

「な、何事だ！？。」

ベラード中将の質問に一人の兵士が言った。

「我が艦隊後方に二個艦隊規模の艦艇が接近を確認！！。また、前方に一個艦隊規模の艦艇を確認！。挟撃されました！！。」

「なん……だと……！！。」

第六艦隊

巡洋戦艦コバルト

戦闘艦橋

さて、視点をコバルト級巡洋戦艦のコバルトに、戻ってきました。

ファルディア元帥は一人の通信兵にこう言った。

「通信兵、フェザー・シュトラッサーに伝達。ＳＥ、ＣＢＣＯ、ＳＡ、ＮＳＳＵ（我、巡洋戦艦コバルト、奇襲、挟撃作戦成功）。とな。」

通信兵はイエス、サー！！。と言い、通信機を操作した。

ヒピッっと言う音と共に送信完了の文字がモニターに映った。どうやら送信が成功したようだ。

「艦長。第十六艦隊旗艦の艦橋に敵砲弾が直撃、同艦は戦闘、航海不能に陥りました！。また、ゴスペラー少将が負傷！、意識不明とのこと！。なお、第十六艦隊臨時指揮官は本艦隊の傘下に下るとの事。」

兵士の一人が言った。

ファルディア元帥は、やっぱりな。と言う顔をし、

「第十六艦隊は敵右翼艦隊の側面を叩け。第八艦隊は、敵左翼艦隊

の側面を艦載機で叩け。我々第六艦隊は敵中央艦隊後方を叩く。全軍、突撃！！。」

っと叫んだ。第六艦隊はV字になり、敵中央艦隊後方を奇襲した。第九艦隊、第一艦隊は敵艦隊の正面、第七艦隊、第八艦隊はアルベイ艦隊左側、第十六艦隊は右側を挟撃し、敵艦隊をフルボッコ状態にしている。アルベイ連盟艦隊は完全に混乱しており、指揮は愚か、艦隊整列もままならない状況と化していた。

数分後、アルベイ艦隊は壊滅状態になった。残っている艦は大破した旗艦ウィルバーシュと中破した戦艦五隻、大破した巡洋艦が八隻、同じく大破した駆逐艦が四隻。計十八隻のみとなった。アルベイ連盟敗走残存艦隊は降伏し、第六、第八艦隊に牽引、輸送を行った。兵士の一人がファルディア元帥に近寄り、こう言った。

「司令官。敵残存艦隊をどう致しますか?。」

兵士の質問に、ファルディア元帥はこう言った。

「残存艦から兵を下ろし、捕虜にする。また、残存艦を探索、どの様な構造で出来ているのか確認だ。それと、兵装と機関はどんなものかも確認する。」

どうやら兵士は理解したようだ。
艦橋の艦長席から見て右側の奥から四番目の兵士が、突如としてこう言った。

「司令官！。残存艦隊ごとのワープ体制が整いました！。何時でも行けます！！」

それを聞いたファルディア元帥はこう叫んだ。

「全艦、ワープ体制に入り、フェザー・シュトラッサーに続け！！。」

ファルディア元帥が言った瞬間、二重の円に囲まれた六芒星と、円と円の間に何やら変な古代文章モドキが羅列を組んで、艦隊を囲んだ。
当然ながら、ウィルベル連合艦隊は混乱した。唯一、混乱していない艦はコバルト級巡洋戦艦フェザー・シュトラッサーだけであった。
魔法陣らしき物は発光し、目を開けていられないほどに輝きを放った。
数十秒たった後に残っていたのは、闇と恒星が出す光だけであった……。

序章

完

次号、未知の異次元！！

君は生き残ることが出来るかね？。

舞台裏

「はいどうも舞台裏ラジオＴＭＴが始まりました。司会は私、本作者と、本作品で登場し、自作品をのぞき他作品ではほぼ高確率で他作品では見られない、性別がはっきりした女性ナレーション。エレナ・フォートと、ウォーシップガンナー２～鋼鉄の咆哮～で登場するキャラで苗字が全く覚えていないヴェルナー中将で、お送りいたします！！。」

Ш（ °皿 °）

エレナ「舞台裏限定で名前が着きます。本作者よ。コンマで言い切るな。小説だからこそ分かるが、実際何言っているのかわからないぞ。」

ヴェルナー「全くだ。それとエレナさん。胸を触らせ（ゴッ
ゴバッ。」

エレナ「いつもどうりだな。ヴェルナー。」

本作者「それでは最初に、異次元平行世界第９８２２世界で登場する方々の質問です。エレナさんお願いします。」

エレナ「それでは最初の質問です。
ペンネーム
平和好きなＳｃａｒｌｅｔさんの妹さんからの質問
ある人から他の作品と繋がっていると聞いたのですが、本当ですか？。
とのことです。それは私も気になってました。本当ですか？。」

本作者「はいその通りです。他の自作品と繋がっておりますので、自作品同士のコラボが有ります。」

エレナ「そうなんですか。」

本作者「それでは次の質問です。ヴェルナーさん、お願いします。」

ヴェルナー「はい。それでは次の質問でーす。
ペンネーム
平和好きなＳｃａｒｌｅｔさんからの質問です。
基本、どの作品が基盤となるんですか？。
とのことです。」

本作者「それは異次元平行世界第９８２２世界、で　は　な　く
魔法少女リリカルなのは……なのか？。です。そこを基点に進め

たいと思います。」

ヴェルナー「ほぉー。」

本作者「それでは次の質問です。エレナさんお願いします。」

エレナ「はい。それでは次の質問です。
ペンネーム
一回しか出てこなかった幼なじみさんからの質問です。
小説の進行ペースはどれぐらいですか？。
だそうですよ？。」

本作者「思い付きから始めてしまったので不定期です。では次の質問、ヴェルナーさんお願いします。」

ヴェルナー「はい、それでは次の質問です。
ペンネーム
主人公さんからの質問です。
ネタのストックはどれくらいですか？。
ですって。」

本作者「思い付いたら即実行が信念ですので有りません。」

ヴェルナー「つまり、常時ネタ切れ状態何ですね？。」

本作者「ＹＥＳ、ＥｙｅＹｏｕｋｙａｎ！！。」

Ｅｒｅｎａ「ＤａｒｏｕｔｏＯｍｏｉｍａｓｈｉｔａｙｏ。」

ヴェルナー「なぜに英語、それもローマ字で表した。」

本作者「気分だ。」

エレナ「コッチからしてみれば良い迷惑だ。それと、本作者。」

本作者「ん？
（ゴッ
ゲボラ！！。」

ヴェルナー（実況）「エレナの右ストレートが決まったー！。エレナ、左アッパーを打ち出し、本作者が倒れたと同時に踵落しを決めたー！！。おおっと？。エレナ、本作者を掴み、バルカンジャブを決めてます！！。おお！、本作者に巴投げをかました～！！。」

エレナ「今日はこれぐらいで、許してあげるわ。」

本作者「ひどい……。」

ヴェルナー「それでは、次の質問なんですが、異次元平行世界第９８２３世界のお便りです。最初の質問の方
ペンネーム、世界有数にして、神の医師と言われる方からの質問です。
ＳＦなのに何故ファンタジーが混じっているんですか？。
だそうですよ。」

本作者「ついやってしまった。反省はしていない。後悔もしていない。でもストーリーの進行に必要なのでこうした」

エレナ「……。」

本作者「それでは、次の質問です。」

エレナ「逃げたな。」

本作者「
ペンネーム
英国女王陛下さんからの質問です。
全作品繋がっているのですか？。その通りだぜ。」

ヴェルナー「次の質問です
ペンネーム
核融合の力を持った人からの質問です。
最終的に何を目指すのですか？。
とのこと。」

本作者「目安は完結させることだ。」

エレナ「次の質問の方々は未開異次元平行世界第１９４１１２８世界の方々からの質問です。
まず、最初の質問です。

ペンネーム
……読めません。」

本作者「どれどれ。……。闇に潜む殺意さんからですね。」

エレナ「分かるんですか?。」

本作者「ちょっとしたチートだ。実のところ、線と点だけだからわからないのだ。」

エレナ「ですよね~。で、内容は何ですか?。」

本作者「
飛ばされた艦隊編成の詳細を希望します。
P・S・
こんなふうにしてすいませんでした。自分の癖です。
だと。」

エレナ「自分の癖ですか。なら仕方ないですね。」

本作者「それと、艦隊編成の詳細は下です。」

第六艦隊

旗艦
コバルト級巡洋戦艦
コバルト
大破

フィンガー級巡洋戦艦
フィンガー
中破
デラード
中破
バード級巡洋戦艦
バード
中破
比叡型重巡洋艦
比叡（ヒエイ）

中破
夕張（ユウバリ）
中破
古鷹（フルタカ）
中破
天龍（テンリュウ）
大破
那智型軽巡洋艦
那智（ナチ）
中破
足利（アシカガ）
中破
羽黒（ハグロ）
大破
愛宕（アタゴ）
大破
松型駆逐艦
松（マツ）
大破
梅（ウメ）
敵弾が艦首を貫通、機関室に直撃し爆沈
桜（サクラ）
大破
鈴（スズ）ランチャー発射基の弾薬庫に着弾、爆沈
第八艦隊
旗艦
エセックス級正規空母
エセックス

中破

護衛艦

エセックス級正規空母

レンジャー

小破

ミッドウェイ級正規空母

ミッドウェイ

小破

エンタープライズ

中破

高雄型重巡洋艦

高雄（タカオ）

大破

高妙（コウミョウ）

大破

最上（モガミ）

大破

海鳥（ウミドリ）

大破

琉球（リュウキュウ）

大破

青葉（アオバ）

大破

クリーブランド級軽巡洋艦

クリーブランド

大破

サンフランシスコ

大破

インディアナポリス

大破
セントルイス
大破
ボストン
艦矯爆散後、集中砲火を喰らい、轟沈
アストリア
機関室に被弾、爆沈

第十六艦隊
旗艦
グラーフ・ツェップェリオン級正規空母
グラーフ・ツェップェリオン
艦矯にミサイル被弾、大破。航空機発艦、指揮管制、航行が使用不能、艦大破

護衛艦
エウロパ級正規空母
エウロパ
大破
天城型正規空母
天城（アマギ）
飛行甲板大破、艦載機発艦不能、機関損傷、戦闘不能、艦大破
赤城型正規空母
赤城（アカギ）
大破
加賀型戦艦
加賀（カガ）
艦矯大破、戦闘、航行不能、艦大破
ドットリオ級戦艦
ドットリオ

大破
アドミラル・ヒッパー級重巡洋艦
大破
アドミラル・ヒッパー
大破
バルクンテ
全砲塔大破、使用不能
グニグンテ
艦橋、機関室、弾薬庫に被弾、爆沈
阿賀月型軽巡洋艦
阿賀月（アガツキ）
大破
阿武隈（アブクマ）
大破
阿賀野（アガノ）
大破
陽炎型駆逐艦
陽炎（カゲロウ）
大破
雪風（ユキカゼ）
小破
島風（シマカゼ）
中破
秋風（アキカゼ）
８０ｃｍ四連対消滅反応弾発射基一基に被弾、対消滅を起こし消滅。
第一艦隊
司令塔旗艦
コバルト級巡洋戦艦

フェザー・シュトラッサー
中破

コバルト級巡洋戦艦
アラスカ
小破
コンテ・デ・カブール
大破
ヘーゼルナッツ
フェザー・シュトラッサーを庇い、左舷弾薬庫に引火、沈没
グルセイナウ級巡洋戦艦
グルセイナウ
小破
フェンラーガ
無傷
ビビーザ級高速正規空母
ビビーザ
微破
ファーラザス
微破
アラード
微破
クラークス
小破
三隈型重巡洋艦
三隈（ミクマ）中破
鈴谷（スズタニ）
大破
熊野（クマノ）
中破

利根型軽巡洋艦
利根（リネ）
大破
筑摩（チクマ）
大破
伊吹（イブキ）
中破

第七艦隊

旗艦
多摩型重巡洋艦
多摩（タマ）
小破

龍田型重巡洋艦
龍田（リュウデン）
小破
能代（ノウダイ）
小破
川内（カワウチ）
小破
神通（シンツウ）
小破

第九艦隊

旗艦
金剛型高速戦艦
金剛（コンゴウ）

無傷
比叡（ヒエイ）　無傷
霧島（キリシマ）　無傷
榛名（ハルナ）　無傷
山城（ヤマシロ）　無傷
扶桑（フソウ）　無傷
無傷
摩那（マナ）　摩那軽巡洋艦
北上（キタガミ）　微破
名取（ナトリ）　微破
大井（オオイ）　微破
鬼怒（キド）　微破
微破

本作者「と、このように艦隊編成でなっています。」
＼（＾Ｏ＾）／

エレナ「いったい何があったんですか。」

本作者「薬指の第二関節部分を切って痛かった。（２０１１年５月２５日当初）そしてその日、よそ見をして電信柱にぶつかって痛かった。今は何ともない。」

エレナ「あっそ。」
本作者「ひでぇ。」

ヴェルナー「最後の質問です。
ペンネーム
名無しさん

主人公達はどこに飛ばされたんですか？
」

本作者「異世界ですが何か？。」

エレナ「（立ち直り早）でも、ＳＦ物の筈ですが？。」

本作者「こまけぇことはいいんだよ！！。」

エレナ「……「すいませんでしあ。（土下座）」分かれば良いんですよ。」

ヴェルナー「ＳＦファンタジーもどきですよね。」

本作者「どんなふうに思っても構わない。私は何とも思わん。」

ヴェルナー「いや、それは駄目じゃないですか？。」

本作者「そんなもんしらん。」

ヴェルナー＆ａｍｐ；エレナ「えぇー……。」

本作者「さて、ノリとテンションで乗り切ろうと思う作者と。」

エレナ「ゲスト二名によるラジオもどきの場所で、質問を答える空間とゆうなのおまけをご覧、ありがとうございます」

本作者「最後に私から言うことは一つ。

ゆっくりしていってね！！

」

「あぁ、後、出番無いかもよ?。」

「!?」

序章（後書き）

頑張っていこう。（色々と）

第一章　未知の異次元

ＡＭ７：４４
ストレイブ大陸
エーゲル王国
ベールス学園
第四学園寮
０１０１号室前

此処、エーゲル国のある学園、ベールス学園の第四学園寮の通路に銀髪に、赤色の眼をした姿の少女は扉を叩き、扉越しに言った。

「リース?。起きてる?。」

すると、中から声が聞こえた。

「起きてるわよ。直ぐに出るから待っててて。」

部屋の中からバタバタと音をたてながら、扉を開けた。

「ごめんレイ、待った?。」

レイと呼ばれた少女は言った。

「大丈夫よ、リース。今来たばっかりだから。」

レイはリースと呼んだ少女に笑顔で言った。それを見たリースも笑顔で帰した、が、若干元気が無く、足元がふらついていた。それを見たレイは不思議に思い、言った。

「リース。昨日何かあったの？。」

レイのその言葉に、リースは僅かながら躊躇った後、顔を伏せた。すると、目の端から僅かに涙を零した。レイは何かを察し、同時にリースが心配になり、言った。

「大丈夫？。今日は使い魔契約の日だけど、休む？。リース。」

リースは弱った笑顔で、レイに心配をかけないようと思い、言った。

「大丈夫よ。足がふらつくだけだから。」

そう言って、リースは歩こうとしたが、倒れそうになった。それをレイは素早くリースを支え、溜め息を吐いて言った。

「リース、やっぱり休んだ方が良いわよ。」

それを聞いたリースは、嬉しく感じたが、自分が決めたことを、最後までやり遂げたいという気持ちが強く、その気持ちをレイに言った。

「レイ、心配してくれてありがとう。でも、私はこればっかりは譲

れないの。」

リースのその言葉を聞いて、レイは何か言いたそうになったが、諦めた顔になり、言った。

「そう……。解ったわ。リースは一度決めたら、絶対に曲げない主義だものね。」

レイのその言葉を聞いて、リースは礼と謝罪を言った。レイは気にしてないわよ。と言い、リースを背負って学園の正門に向かった。

学園正門前

レイはリースを背負って学園の正門前まで来た。辺りは暗く、正門にある明かり以外は殆ど真っ暗である。また、正門には人だかりが

出来ており、その中で図体がでかい人が突如として叫ぶように言った。

「リース・フェータル、レイ・フェータル！。さっさとしろ！。１０分後に出発するんだぞ！！。さっさと列に並べ！！。」

人だかりからヒソヒソと陰険を言っているようだ。
やれ、落ち零れが来た、とかやれ、魔力の無い奴が来ても意味ないだろ、など、そんな言葉が、だ。
リースはレイに背負われているが、一層力強くレイに抱き着き、それを守るようにしながら、レイは人だかりに向かった。リースは手を小刻みに震わせていた。どうやら彼等と何かあったようだ。

「よーし。生徒諸君。これから使い魔契約をする。だが、それにはペペラスト大陸に向かわなければならない。なので、船に乗って向かう。船は校庭に着地するため、校庭に近づかないように。九分後に船が到着する。何か質問は？。」

図体が大きい人が言った。人だかりの一人が手を挙げた。

「ビンドゥー先生。何故ペペラスト大陸なのですか？。」

図体が大きい人、フルネーム。ビンドゥー・アーバンが質問した生徒に言った。

「理由は至極簡単だ。過去に学園に収まりきれない使い魔を召喚した生徒がいて、学園の一部が壊れたのだ。そのため、世界一大きいペペラスト大陸で召喚せざるおえなくなったのだ。分かったな？。」

質問をした生徒は成る程、と理解したようだ。

「他は居ないか？。」

ビンドゥーは人だかりを見渡しながらそう言った。

「居ないようだな。おぉ、もうすぐ船が来る時間か。」

ビンドゥーは空を見てそう言った。空から風を切る音と、何かが唸る音が聞こえてきた。そして空から全長３６２Ｍ、全幅６１Ｍも有る木造船が来た。
どうやら木造船の横に、総計十四個のプロペラ式のエンジンが着いた木造船のようだ。木造船は校庭に着地し、タラップを下ろした。

「よーし、先ずはＳクラスから乗れ。その後はＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅと乗れ。」

ビンドゥーはそう言った。生徒達は一番ランクの高い生徒―貴族クラスの人間―が乗った。その次も同じような人間が乗った。と言うより、Ｓ～Ｃまでが貴族でＤ、Ｅが平民だったりする。
全員が乗った船はプロペラを上に向け、エンジンを作動させた。木造船は浮遊し、高さ３２０Ｍまで上がりプロペラの角度を上に４５度にして、時速１９２ｋｍで飛行を始めた。ビンドゥーは生徒達を集め、こう言った。

「生徒諸君。ペペラスト大陸に到着予定時刻は５時間後だ。それまで自由行動、自由見学だ。ただし、艦長室と食物室は立入禁止なので、入ろうとしないように。後は大丈夫だ。それでは解散。」

ビンドゥーが解散と言った瞬間、バラバラに別れて木造船を見学しに行った。

リースとレイは甲板に残り、艦首に向かった。二人は艦首に有るベンチに座り、外を眺めていた。そしたら船の右正面から日が昇りはじめた。どうやらこの世界の太陽が出はじめるのはＡＭ８：１２のようだ。とても美しい光景だ。

《これより、高速航行を行います。船外に居る方は船内に御戻り下さい。繰り返します。船外に居る方は船内に御戻り下さい。》

突如、船に放送が船内と船外に流れたリースとレイ、他数名は船内に入って行った。

船の全エンジンは正面ではなく、後ろ側に向け、プロペラの回転を逆転させ、Ｘのように変形し、船の中心の両側から翼が出てきた。翼の形は主翼と尾翼を一まとめにした形状である。通称デルタ翼だ。また、船そのものが変化し、まるで飛行船の様な形になり、その周りに何やら薄い膜が張られた。高度３２８０ｍで時速１６８８ｋｍで飛行をはじめた。レイとリースは船内を歩きはじめた。数分歩き続けた二人は途中、誰かに呼び止められた。

「リース、レイ。ちょっとこっちに来い。」

その誰かはボサボサの黒髪に黒いフード付きロングコートで体を隠し、目を閉じている男のようだ。

リースとレイはその人物を見て驚いた。

二人はその男に近付き、言った。

「足利先生、一体何故此処に?。」

足利と呼ばれた男、足利縒智（アシカガヨリトモ）は二人に言った。

「お前等が心配だったから、本来、乗る筈の教師一人を説得して変

わってもらった。」

縒智のその言葉に二人は苦笑いをした。そんな彼にリースは言った。

「心配し過ぎですよ。足利先生。いつかストレスでハゲますよ。」

それを聞いた縒智は笑いながらリースに言った。

「１４でハゲるのは、流石に嫌だな。」

二人はそれを聞いて笑い、縒智もそれに釣られて笑った。

「あぁ、そういえば奴らとの縁は切ったのか？。」

縒智は笑いを止めて、真剣な顔付きになった。二人も同じように顔付きになり、傾いた。レイはそのあと、言った。

「とは言え、あいつ等がしつこく付き纏ってきて、あまり、意味は無いわね。既にリースが、ね。」

それを聞いた縒智は、やっぱりかぁ、とゆう顔をした。そして、リースはトラウマを思い出したかの如く、体が震えはじめた。レイはそれに気付き、リースを抱き、子供をあやす様に言った。

「大丈夫よ、リース。彼等は居ないわ。落ち着いて。」

リースはレイに言われた通りに遣り、気を落ち着かせた。

「有り難う、レイ。」

リースはレイに感謝した。するとレイは言った。

「かわいい妹の為よ。」

リースはレイの言葉にクスリ、と笑った。また、縒智も笑ったが、直ぐに縒智は真剣になり、言った。

「奴らは腐っても貴族。それも、バックにやばいのが居るからな。罰しようにも揉み消される。それに、一種の暗黙のルールでもあるからな。どうしようもないよ。」

縒智は壁に寄り掛かり、そう言った。それを聞いた二人はとても悔しい気持ちになった。どうしようもないと理解していても、何とかしようと必死に生きてきた二人からしてみれば、一種の死刑宣告のような物だ。

《生徒の皆さん、ペペラスト大陸の使い魔契約所に到達しました。甲板へ集合してください。》

船内に放送が流れ、それを聞いた三人は甲板へ向かった。

ＰＭ０：５４
船甲板

甲板上に生徒が大分集まっていた。船の一番前に台が有り、その上に一人の女性がたっていた。女性の姿は腰まである長髪で金色で、目の色は翡翠色で、スタイルはとても良く、ボンキュッボンと言うスタイルである。また、顔はだれもが振り向く程で、服装は黒のローブで身に纏っている姿は何故か非常に似合っている。

「皆さん。放送は聞きました？。」

女性は生徒全員に聞いた。生徒の殆どはどこぞの卍の絵がある腕輪を着けた軍隊のように手を挙げた。それ見た女性は言った。

「これから下船します。下船する順番は乗船と同じようにＳ、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅの順番です。分かりました？。」

それを聞いた生徒の殆どが、声を高らかに言った。

「解りました！。セイレーン先生！。」

まるで軍隊の如くの返事をした生徒達。女性、セイレーン・テロッサはそれを聞いて、笑顔になり、言った。

「それでは、下船を始めてください。」

生徒全員は乗船と同じ順番で下船した。全員が下船すると船はプロペラを回し、空に飛んで行った。それを見届けたビンドゥーは言った。

「今から使い魔契約を行う。先ずはSクラスの生徒諸君が行い、終わり次第A～Eの順番にやっていく。分かったな。」

それを聞いた生徒諸君は元気良く返事をした。それを聞いたビンドゥーは言った。

「使い魔を召喚するには魔力を魔法陣に流し、我が盾と成り、剣と成りて我を守り、我が命に従え。と詠唱すれば使い魔が現れる。その時に使い魔が出す課題をクリアすれば、使い魔との契約が完了だ。分かったな？。」

一人の生徒が手を挙げた。それを見たビンドゥーは言った。

「どうした？。五大貴族のイービル・クラウン。何か質問か？。」

イービル・クラウンは言った。

「不測の事態が起きた場合はどうするんですか？。」

イービルのその言葉にビンドゥーは少し悩み、言った。

「基本的には手を出さないが、場合によっては契約を中止する。なお、その際召喚された者が危険と判断した場合、我々教師とクーベル国の兵士が総力を上げて相手を倒す事になっている。解ったな？。

」

それを聞いたイービルは微笑みながらお礼を言った。

「他に質問は無いか？。」

ビンドゥーはそう言いながら生徒全員を見た。

「居ないようだな。では、最後に一つ。この後は自由行動だが、無理をしすぎないように。以上。」

ビンドゥーがそう言った瞬間、貴族組が目を光らせ、平民組は脱兎の如く、逃走した。それと、いつの間にか半径２０？のドームが出ていた。セイラとリースは共に全力疾走して、森に駆け込んだ。その後に何人か貴族がついて行った。

PM2：18
密林

「何処に行った?。」

「お前等は向こうを探せ！！。俺達は他を探す！！。」
貴族組は半々になり、別々に探索を始めた。貴族組の上にリースとレイが居た。二人は一息ついて、木に寄り掛かった。
「まずは、彼らから逃げ切れたね。」
リースはそう言った。レイはそれを聞いて、言った。
「そうね。ただ……、何人かは逃げ切れなかったみたいだけど。」
そう言いながらレイは、双眼鏡を覗きながら、何処からともなく、この世界に流通していない銃火器を取り出した。無論、弾薬は麻酔入りだが。リースはその銃を見て驚きながら言った。
「ねぇ、レイ、それって、今話題の銃、ＭＲ－１１９２ボトルアクション式スナイパーライフルだよね？。」
レイはリースの言葉に言った。
「いいえ、スプリングフィールド１９０３よ。」
レイのその言葉にリースは驚きながら言った。
「それって、もしかして旧西暦時代の銃！？。」
リースのその言葉に、レイは驚きながら言った。
「ええ、そうよ。よく知っているね。」

リースは、その質問にこう答えた。

「レイが銃器に関してがっつり教えてくれたから、覚えちゃったのよ？。」

それを聞いたレイは申し訳なさそうに謝った。それを見たリースは慌てて言った。

「そう言う意味で言ったんじゃないよ。その知識のお陰で結構、役に立つ事が一杯あったんだからね。だから頭を上げて？。ね？。」

その言葉を聞いたレイは顔を上げ、リースに礼を言おうとしたが、下から見つけたぞ。っと大きな声が聞こえ、顔を声が聞こえた方に向けた。下にはＳクラスとＡクラスの生徒が数人ずついた。生徒はなにやら唱えはじめたが、レイが即座にスプリングフィールドを撃ち込んだ。サプレッサーをしていない１９０３は、けたたましい銃声を鳴らし、放たれた麻酔弾は、一人の少女の肩を掠り、後ろの木に当たった。レイは舌打ちをし、ボトルを上げ、手前に引っ張り、薬莢を飛び出させ、即座に戻した。この動作を約一秒で終わらせ、直ぐに下に居る生徒を狙うが、生徒達の準備が整ったようだ。

「「「《スパーク》」」」

ＳとＡクラスの生徒が言った瞬間、手から電撃を放った。

レイとリースは見た瞬間、木から飛び降りた。リースは飛び降りた瞬間、青色の筒状の物体を投げこみ、生徒達はそれをなんだろうかと見ていた。すると青色の筒状の物体は破裂し、強力な光と爆音が鳴り響いた。リースが投げた物体は閃光手榴弾だったのだ。生徒達はそれをまともに喰らい、のた打ち回っている。

リースとリースは耳栓と目を腕で防いだ為、何とも無い。リースと

リースは即座にその場から離れようとしたが、何処からともなく声が響いた。

《Eクラスの生徒は使い魔契約所に集合してください。》

二人はそれを聞き、不思議に思いながらも使い魔契約所に走って行った。

使い魔契約所

リースとレイは契約所にたどり着いた。そこにはリース達を含めて１０人程の人数がいた。するとビンドゥーが言った。

「集まったな？。これから使い魔契約を行うぞ。その方法は前にも言ったが、『我が盾と成り、剣と成りて我を守り、我が命に従え』と唱えれば、魔物は出てくのだが、あることを教えよう。本来は機密事項だが、実のところ、この魔法陣に魔力を込めるだけで良いので、唱えても意味はない。が、確実に召喚を成功させるのにはどうしても呪文が必要となったんだ。それを議論したら、その結果、このようになったんだ。だから呪文を唱えなくとも召喚出来るが、成功確率はだいたい８０％だ。分かったな？。」

そこに居た殆どの人が、驚いた声を上げた。

そこに新たな生徒達が来た。Ｓクラスの生徒達の中からイービル・

クラウンが威張った顔で歩いてきた。と、言うより、どこぞの烏天狗をどや顔にした感じの顔だった。
うぜぇ。

「やぁやぁ、Eクラスの諸君。調子はどうかね？。」

そう言いながらイービルは、Eクラスの生徒達に近付いて行った。それを聞いたEクラスの殆どの生徒達と僅かな教師が、嫌な奴が来た。と言いたげな顔になった。するとイービルは追い撃ちするように言った。

「この後の模擬戦では僕を失望させないでくれよ？。〝落ち零れ〟の諸君。」

そう言い切るとイービルは高笑いをした。さながら悪役が似合う程であるが、この世界では力が正義とゆう理不尽な世界なのである。だがEクラスの生徒達はそんな理不尽を理解しており、相手に当たり障り無いよう受け流した。特にレイとリースは、まるで存在すら気付いていないかの如く、スルーしている。

「んじゃぁ、始めるぞ。先ずはリース・フェータル、前に出ろ。」

リースはビンドゥーに呼ばれた。ここで改めてリースの姿を説明しよう。リースは小柄で髪の長さが腰まで有り、ストレートヘアで、髪の色は金髪で目の色は赤と、とある魔砲少女の友達と似ている。リースは魔法陣の前に立ち、薄い銀色の霧状の物質、魔力を魔法陣に流し入れた。すると魔法陣が銀色に輝き、こう唱えた。

『共に時を歩み、力を貸してくれる者よ。姿を現れたまえ。』

その言葉に反応したかのように、魔法陣の上に別の魔法陣が現れた。別の魔法陣は下の魔法陣とは違い、外側に二つの円形が有り、二つの円形の間に象形文字らしき物があった。それに中心の円形の中に六角形が存在し、六角形の中に六芒星が存在していた。それを見た周りの人達は大層驚いた。だが、突如として、何かが風を切る音と共にリースは前に押されるようになり、左肩の後ろから血が吹き出した。リースはそのまま前に倒れそうになるが、何とか耐え、右手で傷口を抑え、痛みに耐えながら左手から数少ない魔力を魔法陣に注ぎ続けた。

「リース!?。」

レイが叫んだようだが、今のリースには今の何一つ聞こえていないようだ。現状を維持するのがやっとの状態なのだからだ。その間にも肩から流れる血は地面の魔法陣に流れて行った。
すると、突如二つの魔法陣が放つ光が、銀色から紅色に変色し、更にまばゆい光を発し、一つの魔法陣が拡大した。
教師達はそれをみて、流石にやばいと思い、魔法陣に駆け寄ろうとしたが、見えない何かに防がれた。魔法陣が更に輝き、目を開けていられない程までに輝いた。
輝きが収まり、そこに居た人々は目を開けた。そこで彼等は驚いた。何故ならば、空中には大規模な浮遊する、鋼鉄の船が浮いていたのだ。

巡洋戦艦コバルト
第一艦橋

「……っ、くっ、一体何が起きたんだ。」

そう呟きながら立ち上がったのは、ファルディア・フェアリー元帥だった。その横には真紅大将が倒れており、艦橋にいた全員が気絶していたようだ。ファルディアは無線機を取り出し、言った。

「各班、状況を報告せよ！！。」

数秒後、無線機から声が聞こえた。

《こちら機関室、作業員六名が気絶しているだけで損害なしだ。》

誰かがそう言った後、直ぐに他の人が言ってきた。

《こちら第一砲塔、損傷した第一、第三砲門が治っています。》
《こちら第二砲塔、同じく損傷した第二砲門が治っています。》
《こちら第三砲塔、第一、第二砲塔と同じように損傷第一、第二砲門が修復しています。》
《こちら対空指揮所。全対空兵装が修復しています。》
《こちら航空機格納庫、ハッチや航空機が治っていて、無くなった航空機が補充されてます。》

次々と舞い込んできた情報は俄に信じがたい物ばっかりだった。
すると、他の艦艇から連絡が来た。

《こちら、フェザー・シュトラッサー。コバルト、聞こえるか？。》

その声を聞いたファルディアは驚き、言った。

「葉月司令官！！」

その声の主は葉月慧丞からだった。

《フェアリー元帥か。丁度良かった。艦艇の異変には気付いたか？。》

葉月はファルディアにそう聞いた。ファルディアは言った。

「はい。ですが、何故、艦が治ったのでしょうか？。」

ファルディアのその質問に葉月は言った。

《予測だが、恐らく先程の何かだろうな。あれに飲み込まれて、何等かの理由で時間が戻ったのだろう。現に死んだ筈の兵がいる。まぁ、流石に戦没艦は戻って居ないがな。》

葉月のその言葉にファルディアは言った。

「そんな夢物語があるのですか？。」

ファルディアの疑惑に葉月は腕を組んで言った。

《もし誰かがこの艦隊を修復したので有れば、裕に一年はかかる。その間に我々は気が付いてばれるだろう。例えこの艦隊すべてを一度でやったとしても最低は一ヶ月はかかる。それ以前に、そこまで

のドックがウィルヘルにある訳が無い。かといって、バラバラに分散させて修復させたとしても、かえって時間がかかりすぎる。消去法で行くと、道理が合うのが、さっき言った時間が戻る推測以外、思いつかない。解ったな？。》

葉月のその言葉に、確かに。っと、言って自身を納得させた。すると、無線から慌てたように誰かが言った。

《本艦隊の近辺に、未確認艦隊を捕捉！！。いくら調べてもデータベースからは出てきません！！。》

その言葉に、葉月とファルディアは驚いた。何故ならば、どれだけ新兵器や新造艦を機密にしようと、自動的にマザーコンピューターにデータが入る筈なのが、入っていないと言う現実に、だ。つまり、マザーコンピューターの監視網をくぐり抜け、建造された、ということになる。

だが、それは不可能に近い。なぜならば、彼等の先祖が、とんでもない異物と戦い命ながら撃退することが出来た。そのため、もし、次に異物と戦う時が来たとき、その情報を使い、戦術を立てる事が定められている。それゆえ、マザーコンピューターには、膨大過ぎるデータと情報、資金等が詰められている。また、敵味方を識別するための意味も込めている。即ち、未確認艦隊はその異物とは異なり、彼等とも異なる存在と言うことが判明した事になる。

すると、コバルトに僅かな振動が走った。そして無線から先程とは違う声が言った。

《第三艦橋に何かが被弾！。

損害、認められず！。ですが、耐熱シールドに反応有り！。》

それを聞いた葉月とファルディアは、今度は違和感を感じた。耐熱

シールドは、レーザーなどの光学兵器にはかなり強い兵器だが、実弾、特にＲＰＧ－７みたいな対戦車携帯ロケットランチャーには、有り得ない程に弱いのだ。例えるなら、戦艦に爆竹を投げ入れるのと、紙一枚に全核弾頭をかき集め、叩き込むような程の差である。

閑話休題

耐熱シールドに反応があった。と、言うことは、誰かがこの艦に攻撃した。と、言うことだ。だがコバルトの、特に、第三艦橋は耐熱シールドが張られているが、レーザー二、三発で撃沈されるぐらいの強度しか無いのに、損害が無い。と、言う報告で、その理由を聞こうと、ファルディアは言った。

「ＣＩＣ、それは間違いじゃ無いのか？。」

その質問に第三艦橋の無線兵は言った

《間違い有りません。》

すると、他の通信兵が言った。

《こちら、三次元レーダー室、司令、本艦下方に多数の民間人らしき者達が居ます。どうしますか？。》

ファルディアは少し悩み、言った。

「第六陸戦隊と共に地上に降下する。第三艦橋、いつでもハッチを開閉出来るよう、準備しておけ。」

ファルディアのその命令に、通信兵は、言った。

《了解！！。》

通信兵が言い切った直後、葉月はファルディアに言った。

《ファルディア元帥、本来なら私も行きたい所だが、他の味方艦の連絡と、未確認艦隊との交渉をしなければならない。下方の民間人達の交渉を頼んだ。》

葉月のその言葉を聞いて、ファルディアは言った。

「了解。その任、全身全霊を持って成功させます。」

ファルディアは、葉月にそう言った。葉月は、頼んだぞ。っと、言って、モニターを消した。ファルディアが乗る艦のモニターも消えたようだ。

ファルディアは席を立ち、近くでいまだに倒れている真紅を起こした。真紅は頭を振り、立ち上がった後、ファルディアに言った。

「ファルディア元帥、一体何があったのですか？。説明してもらいたいのですが？。」

真紅の質問にファルディアは言った。

「それに関しては、このテープレコーダーを聞いてくれ。私はこれから第三艦橋に向かう。」

ファルディアはそう言った後、即座に昇降機に向かい、昇降機に乗り込んだ後、横の装置を弄り降下して行った。

第三艦橋

「ファルディア元帥。第六陸戦隊、何時でも行けます。」
ファルディアは第三艦橋にたどり着くなり、兵士にそう言われた。
兵士の右肩に中将の証を着けていた。その奥には数百人程の兵士がいた。それを聞いたファルディアは頷き、言った。

「我々はこれより、地上に下りて、艦隊下方にいる民間人らしき者達に接触する。その際、この惑星がどのような所かを聞く。質問は？。」

兵士達は直立不動で何も言わなかった。

「無いようだな。第六陸戦隊、降下するぞ。」

ファルディアがそう言い切ったと同時に、ファルディアの後ろの壁が開いた。そして、ファルディア達は、地上に降下していった。

時を遡り、１２０分前。

状況は最悪である。ファルディア達の艦隊（他多数）が上空に現れて、混乱しない人物がいるのなら、相当肝が座っているのか、ただの馬鹿である。が、縒智だけは全く違う反応で、ファルディア達の艦隊よりも上空を目を開いて驚いていた。

（あっ、あれは、伊吹?!。なんでここに!?。それに、高雄、天

城、富士も。三年前にディルパンド帝国に悪用されるのを避けるために、爆沈させたのに、なんでここにいるんだ！。）

そう、縒智はファルディア達の艦隊よりも約３０？上空に、四隻の艦が存在していた。この艦の特徴は、非常にシンプルで、シャープな葉巻型になっている。伊吹と呼ばれた艦は全長９２０ｍ、全幅３２ｍ、全高３２ｍの大型艦艇で、兵装が主砲の大型連装収縮レーザー砲六基の内、四基は艦首側に向き、内二基が艦底に配置されている。二基は艦後方に向いており、内一基も艦底に配置されている。なお、艦橋に並ぶような配列で射線に砲が被らないように考慮がある。副砲の中型内蔵式単装拡散レーザー砲は、艦の横に八基配置されており、大航海時代の様に舷側に砲身が出るようになっている。ただし、最大上角が６０度、最大稼動方位７５度までしか上がらない。そのため、舷側四基の内、二基が砲身を逆にし、同じ様に最大下角を６０度にされている。他にも、対空パルスレーザー二十四基搭載されている。また、この艦型には最終決戦兵器として艦首に収納型超高密度レーザーカノン砲を装備されている。その辺の詳しいとこはまた何時か。

縒智の反応に気付いている人間はいない。目の前の事で一杯一杯なのだ。周りに気を使うほどのレベルではないのだ。が、実は四隻の上空、約１？に目に見えない状態、完全ステルス状態で超巨大艦が、それも艦体全長４６？、艦体全幅２１？、艦体全高３２？、翼部全長３６？、翼部全幅２５？、翼部全高６？、尾翼全長２６？、尾翼全高１２？、尾翼全幅４？なんて言う某空をサーフィンするアニメで出てくる月の光号が元の要塞級戦艦が居たりする。

後々出てくるけど、それは置いといて。

「ふん、何を怯える必要があるんだね。あの鋼鉄の船は武装が無い

のだろう?。それに、速度も遅いだろうな。なら、直ぐに対応出来るこの僕が、説得をしてやろう。」

唐突に、そんなことを抜かしただらぼうは、Ｓクラスの一人で、学籍首位をもち、学園きっての最強と言われる人物、イレイザー・クラップだ。異世界物の物語で言えば、オリ主で最強と言う奴だ。だが、かなり欲深く、欲しいものは力ずくで手に入れようとする、糞ったれだ。ついでに、実力だけが取り柄で頭ん中は馬鹿である。リースはイレイザーのその言葉にこう言い返した。

「結構です。自分でやります。」

そう言ってリースは動こうとするが、どうやら肩からの出血が多く、ふらついて地面に倒れそうになり、レイが支えようとしたが、その前に、長髪の銀色で服が青と赤で半々になっている服を着た女性が支えた。

その女性は溜め息をつき、リースをうつぶせに寝かせ、どこからともなく救急箱を取り出し、銃傷にピンセットを入れ、そこから銀色の鉛を取り出し、ガーゼを張り、包帯で巻いた。一連の動作を流れるようにやり、リースを苦痛を与えずやった彼女は、中々のものだ。

「あ、ありがとうございます。」

レイはリースに近付き、治療した女性に礼をした。

その女性はレイに笑顔で言った。

「いえいえ、これも医者の勤めなので。」

そう言って、彼女は立ち上がろうとしたが、何処からともなく大量の火の玉が飛んできた。火の玉は艦隊に飛んで行ったが、約５０ｍ

程で突如としてまがった。あちらこちらに飛んで行った火の玉の半数が地上に降り注ぐ様な形で、降ってきた。集団で固まっていた生徒たちは、教師が張った薄い幕で防いでいるが、リース達はぎりぎり幕の範囲外に居たため、どうしようもなかった。レイは、火の玉がリースに及ばないよう被さり、ギュッと抱きしめ、目を閉じた。すると、突如太いレーザーのような物が火の玉を飲み込み、数多のピンク色の球体が火の玉にぶつかり消滅させて行った。そして空中で亜音速でとんでいる、枝らしき物を背中に付け、宝石のような物を枝らしき物にぶら下げた金髪の少女が、何の前触れもなく槍のような物を取り出した後、横になぎ払った。すると、突然八割の火の玉が破裂した。

この時点で約２０００あまりの火の玉を消滅させたが、上空に飛んだ火の玉のうちの一つがリース達に落下してきた。レイは今度こそ終わったと思い、銀髪の女性が空を見上げ、長弓を何処からともなく取り出し、矢を何処からともなく取り出して放とうとしたが、突如として水色の髪に、蝙蝠のような翼を付けた少女が現れ、その身に似合わない巨大な槍で火の玉を縦に切り裂いた。不意を突かれた女性は唖然としたが、長弓を下ろし、言った。

「あら、有り難う。レミリア。何故此処に居るのかしら?。」

そう、女性が微笑んで言った。レミリアと呼ばれた少女、レミリア・スカーレットは振り向き、鼻で笑った後、言った。

「それはこちらの台詞だ。何故此処に居る、八意。」

小さいながらも、威圧感を放つレミリアは八意と呼んだ女性、八意(ヤゴコロ)永琳(エイリン)を睨みつける。リース達は縒智の手により、既に回収されている。

その姿は正に龍と虎である。その二人の間に、金髪で枝らしき物を

背中に付け、宝石らしき物を枝らしき物に付けた少女が割って入り、レミリアと永琳の頭を掴み、二人の頭をぶつけさせた。心なしか怒っている様だ。ぶつけられたレミリアと永琳は頭の額を抑え、悶えている。得にレミリアは倒れており、唸りながら悶えて居るところを見ると、相当堪えたらしい。教師組や生徒組など、彼女達の関係を知らない人は唖然としているが、魔法陣の中に居る人達（一部除き）は苦笑いをしており、またか。といった感じの空気を纏っていた。すると、金髪の少女がレミリアの頭を右手で掴み、笑顔で言った。

「姉さん、何やってるのかな？かな？。」

お持ち帰り～！と叫ぶ少女の様な感じの言い草だが、その背後に阿修羅が立っていた。それどころか、レミリアを姉と呼んだ少女の右手から黒い光が発しはじめている。剰え右手からみしみしと鈍い音が鳴りはじめている。

レミリアは激しく悶えている。声すら上げられない様だ。それに、身長が若干金髪の少女の方が高いので、持ち上げられている。片手で。

「あ、あのー、すみません。」

そう言って、近付いて来たのは、茶髪でサイドテールをしており、日本人らしいかんじだが、茶色のスーツの様な姿をし、左胸に階級らしき物を付け、首から何やら赤い水晶玉を付けた女性だった。

「此処は、一体何処なんですか？。」

その女性の後ろから金髪の少女が問い掛けた。だが、手に持っているロープがレミリアの首に繋がれている。

レミリアはと言うと、ロープを外そうと奮戦しているが、少女が気絶させない程度に引っ張って外させる気が皆無だった。リース達にばれない様にやっているから、誰も疑問を上げない。
すると、顎鬚が異様に長い老人が前に出て言った。

「此処はペペラスト大陸にあるスフェンク王国じゃよ。」

茶髪の女性と金髪の少女は納得したようだか、レミリアは首を傾げ、三人（内一人は縄を首に付けられている）の後ろに居た永琳は何か考えており、魔法陣にいた他数名は近付いて来て、ふ～ん、そうなんだ。と言いたそうな顔をした。

「へー、そーなのかー。あだ！。」

訂正、一人居た。レミリアに縄を付けた少女とは違い、トンガリ帽子を被り、金髪に白と黒で構成された服を着て、正に魔女と言っても過言ではない少女だった。
その少女を殴ったのは、スカートと服を一体化させた様な黒い服装と、頭に付けた若干古びたリボンを付け、金髪に赤い目をした少女だ。彼女の肩に、柄の時点で身の丈と同じで刃の部分がこの少女二人分と言っても過言ではない大剣をのせる様に担いでいた。
大剣を担いでいる少女はジト目で、殴った少女を見ていた。殴られた少女は、涙目で大剣を担いだ少女に言った。

「何すんだよ。ルーミア。」

ルーミアと呼ばれた少女（名字無し）はこう言い返した。

「魔理沙、逃げる気だったでしょ。」

魔理沙と呼ばれた少女、霧雨魔理沙（キリサメマリサ）は、うぐ、と唸って帽子を深く被った。どうやら図星だったようだ。
ルーミアは左手で頭を抑え、溜め息を吐き、頭を左右に振った。

「あ、あの、彼女達は？。」

そう言ったのは縒智だ。すると、金髪の少女がルーミアの方に顔を向け、言った。

「あぁ、あの二人。知り合いよ。」

縒智は成る程、と思い、金髪の少女の後ろにロープで絞められているレミリアが見えている事を無かったことにした。よく見ると縒智から冷や汗をかいている。

「おい、何かが降って来るぞ！。」

それを聞き、顔を上げると、鉄の船から多数の人が降りてきた。鉄の船から降りてきた多数の人は地表に降り、その中から薄暗い灰色の髪をし、ダークグリーン色の目をした人物だった。

「済まないが、責任者を読んでくれ。」

普通なら、ご都合主義により、話しが繋がるだろうが、そうは問屋が許さない！！。
彼等が言った言葉は彼等が現在共有して使用する国際語であるが、この世界の人間からしてみれば英語やロシア語、ハングル語、フランス語、イタリア語等が混じった様な発言なのであるため、何を言っているのかが通じていないのだ！。

「何を言っているんだ君達は??。君達は相当田舎から呼び出されたのか。はっ!、滑稽だね。君の様な落ちこぼれに相応しいじゃないか!!。」

そう言ったのはイービルだ。どうやら強がって居るようだ。尚、この世界の共有語はイタリアとアメリカ、ロシア語の三つの言葉が混じっている。

閑話休題

そんな彼の言葉を聞いた灰色の髪にダークグリーン色の目をした男性がこう言った。

「んっ、んっ。あー、これで良いか?」

その言葉はこの世界の共有語だった。それは回りに思いっきり驚かせた。ま、当然だろう。最初は何を言っているのかちんぷんかんぷんだったのが、いきなりこの世界の語源で話しかけたのだ。動揺しないほうが凄い。

「もう一度言おう。ここの最高責任者を読んでくれ。」

彼はそう言った。ただそれだけのはずなのに空気が重くなったような感覚に、回りの人がそう感じた。

「やれやれ、血の気が多い方じゃのう。」

そう言いながら、集団の中から一人の老人が出て来た。見た感じでは齢7、80年以上は生きていると思われる。また、青と白のローブと手に身丈程の杖をもっていた。

「学園長!。」

誰かがそう言った。だが、老人は止まらず灰色の髪の男性に近付いた。

「貴殿が責任者ですか？。」

灰色の髪の男性はしっかりと老人を見、言った。

「うむ。儂が此処の責任者、フィアル・ラードックじゃ。」

老人、フィアル・ラードックは灰色の髪の男性と同じ様に見、言った。

「フィアル・ラードック、さん、ですね。私の名前はファルディア・フェアリーです。それで早速ですが、質問してもよろしいですか？。」

灰色の髪の男性、ファルディアはフィアルを見て言った。

「何かね？。」

フィアルはファルディアを見てそう言った。ファルディアはフィアルに言い返した。

「ここは、一体、どこですか？。」

フィアルは何かを悟り、言った。

「ここはヴェスペラントじゃよ。」

フィアルのその言葉を聞いたファルディアは、少しばかり考え、ボソリと呟いた。

「ヴェスペラント、か。聞いたことが無いな。」

フィアルはファルディアの呟きを聞き、微笑みながら言った。

「それもそうじゃろう。何故なら、此処は別の世界じゃからな。」

第一章　未知の異次元（後書き）

一度此処で区切る

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1856r/

転移されますた←えっ

2011年12月13日09時50分発行